

Emerging *Conscience*: Its Circumstances in *Ancrene Wisse*
Ancrene Wisse における conscience 出現の状況

(要旨)

広島大学大学院文学研究科
博士課程後期人文学専攻
学生番号：D194765
氏名：井野崎千代子

本博士論文は、13世紀イングランド南西部で隠遁修道女たちの指南書としてドミニコ会士によって書かれ流布したとされる *Ancrene Wisse*（以下 *AW* と略す）に初出する *conscience* という語彙に着目し、この語彙が現れた際の *AW* における語彙環境を明らかにすることを目的とした。本作品は英語が一つの国家言語として確立するプロセスのうち、古英語から中英語へと変遷していく時期の初期資料として、英語史研究的に高い価値を見出されてきた。豊富な研究材料を蔵する要素の一つに、書かれた言語の多様性がある。原本は英語だが、テキスト中には多くのラテン語引用が含まれ、初出の英語も数多く出現し、英語なのかラテン語なのか識別困難な語彙も伺える。原本は広範囲に広まり、やがてラテン語やフランス語写本も誕生する。

大陸のスコラ学誕生とともに共有され始めた概念の一つに、「正しいことと過ちを区別する精神的場所」を意味する *conscience* がある。英語 *conscience* の初出が本作品 *AW* であり、最も完成度が高いとされ現在の *AW* 研究の底本である Corpus 写本（1270年代もしくは1280年代初頭）においてその語は同じく初出の英語 *inwit* に置き換えられている。しかしながら、現存最古の Cleopatra 写本（1230年代初頭）では別の語彙への置き換えが見受けられ、*conscience* 導入以前の言語環境が残っていることを物語っている。これらのことから、*AW* は *conscience* という語彙によって新たな概念を紹介し、説明し、定着させようとする現場そのものであったとすることができ、現存する写本群を比較参照することで新語彙導入のプロセスを垣間見ることができるとであろうと考えた。Godden（1985）による Ælfric の作品分析からも古英語期にも *inwit* とは別の複数の本来語が *conscience* という概念を表していた形跡があるが、それまでの語彙では的確な概念伝達が不十分と認識されてきつつあった中、語彙 *conscience* の導入の必要性がいよいよ高まったという背景が *AW* に反映されていると言える。*AW* 以降、*conscience* も *inwit* も告白文学を中心に中世英文学においてその存在感を急激に高めていく。*OED* や *MED* に初出の記載はあり、Dobson の Cleopatra 校訂本（1972）には Corpus 写本と Cleopatra 写本における比較、Millett の Corpus 校訂本（2005）では全写本の比較による差異が述べられているものの、これらの語彙に焦点を当てた論考はこれまでにない。*AW* におけるこれらの語彙分析を通して、中世に限らず普遍的な重要性を持つ *conscience* という語彙の英語への参入状況を明らかにすることが本論文の目指したところである。

AW の現存写本は断片も含め 17 写本あり、写本間照合により、*conscience* 導入に関する差異を浮き彫りにすることを基本的手法とし、特に Corpus 写本と Cleopatra 写本を中心に考察を進めた。Cleopatra 写本は最古という重要性を持つもののテキストが大変読みにくく、これまで殆ど研究対象とされてこなかったため、本論文で言語分析の対象としたことに大きな意味があったと考える。

Conscience、inwit を含む関連語名詞全体を便宜上 conscience-words と呼び考察を進めた。以下が各章の内容である。

1 章と 2 章では、写本間照合による研究の有効性を証明した。1 章は Cleopatra 写本の第二書記 Scribe B が第一書記 Scribe A の引用ラテン語の incipit（書き始め語）に加筆している点を、写本比較を通して考察した。その結果、Scribe A は祈祷中心の修道院生活に慣れている読者を対象としており、一方 Scribe B の修正は incipit をよりわかりやすくしたもので、対象読者が広がっていると見なされる要因の一つであるとわかった。Scribe B の修正内容はその後他の写本にも認められ、Scribe A テクストの祈祷定型文が徐々に世俗に適合していたことがわかる。2 章は *AW* 第 1 章ラテン語祈祷文の incipit を 6 写本間で比較し、その差異から読者の性差や特徴に応じた incipit の変更や写本の exemplar の違い、またラテン語 incipit の英語への名詞化などが浮き彫りにされた。

3 章から 9 章が *AW* における conscience-words の分析である。3 章は、現在の *AW* 研究の中心である Corpus 写本を基本として conscience と inwit の全写本間照合を行い、*AW* 全体における分布を表にまとめた。Millett (2005) の全写本照合でそれらの差異は指摘されているが、作表によりわかりやすくなり、語彙使用に拡張が見られる場合にはその記述も行った。これにより Cleopatra 写本では inwit の代わりに ꝑonc が、Pepys 写本では ꝑouꝓth が使われていること、Vernon 写本や S 写本 (French version) には conscience の大幅の使用拡張が見られることなどが容易に確認できるようになった。

4 章は、借用語 conscience 導入に用いられる説明的並置語 ꝑet is について分析した。説明的並置語 ꝑet is はヘルシンキコーパスを用いた Pahta and Nevanlinna (1997) の現代から遡って 14 世紀後半までの研究があるが、13 世紀の説明的並置語 ꝑet is の分析は未だ先行研究がなく、本章による Corpus 写本における ꝑet is の分析が初めての資料となる。14 世紀後半の説明的並置語 ꝑet is の先行研究の分析結果と比較すると、本作品では、紹介すべき先行詞をマーカー以後の後置語によってその性質を説明する、Characterization という種類の用法が突出している傾向が明らかとなり、これは *AW* のオリジナル読者が隠遁生活を希望する女性の平信徒であり、馴染みない語の内容をわかりやすく解説しようとする本テキストの姿勢が伺える。また Corpus 写本の説明的並置語 ꝑet is にはプントゥス[.] が共起するが、先行詞がラテン語の場合プントゥスは ꝑet is の前後に現れ、英語が先行詞場合のプントゥスは前 1 箇所のみ現れる傾向があることが分析によって判明した。この使い方の違いには、ラテン語表記 id est では前後にプントゥスが使われていることに影響を受けた可能性があることを提起した。

5章は、Cleopatra 写本 Scribe A のテキストに対する Scribe B の修正を精査した。その中で、Scribe B が wit を inwit へとした修正が、Dobson の先行研究で言われてきた「誤りを正す修正」ではなく、wit は元のテキストのままで意味をなす動詞であったことを提議した。加えて Scribe B の修正を Dobson の分類を基に分類基準を見直し、Scribe B の修正の中で、inwit に関する修正が特別なものであることを示し、その修正を *theological vernacular revision* と呼ぶことを提唱した。また Cleopatra 写本の *conscience* の vernacular グロス *þonc* の写本全体での使用を調査した結果、聖なることを瞑想する際にも、世俗の物事を考える際にも使われている語彙であり、「正しいことと誤ちを区別する精神的場所」として限定して使われていないことを証明した。

6章は、Corpus 写本をベースには見えてこない Cleopatra 写本にのみ確認できる *conscience-words* を検証した。*conscience* と、罪の意識を確認する際の *consense* との混同が見られたり、French version の S 写本、また Vernon 写本において *conscience* が拡張して使用されている箇所を確認し、後期写本になるに連れて *conscience* の頻度が増すことを確認した。

7章は、Cleopatra 写本 Scribe D による *conscience-words* への修正を検証した。Scribe B と対照させて、Scribe D の *conscience-words* に対する意識を探ったところ、Scribe D の修正には *conscience-words* においては特徴的な修正は見られなかった。

8章は、Cleopatra 写本において、新造語 inwit と綴りが似通い、使われる文脈も共通する前置詞あるいは副詞 inwið を分析した。Inwið は mind や heart と共起し、心の重層性を表す役割を持ち頻繁に現れ、そのトポスを示し、*conscience* や inwit と強く結びついている。OED や MED には inwit の要素は in + wit と説明されているが、inwið が造語 inwit の形成に影響を与えた可能性も否定できない。

9章は、Cleopatra 写本において、*conscience* の同義語の可能性のある語彙、cor、witness、judge そして rule の意味を検証した。その結果、これらの語彙には *conscience* と同じ「正しいことと誤ちを区別する精神的場所」として機能している箇所があることがわかった。AW は *conscience* を初め神学的用語が複数出てくるにも関わらず、それらについての神学的説明は展開されない。AW は隠遁者の生活の手引書であるが lay theology の書とも言える。

10章は、AW と同時期に書かれ、同じ聴衆者、あるいは読者を対象に書かれたとされる Ancrene Wisse Group の9作品における *conscience* を表わす語彙を調査した。これらの作品には散文 AW にはあまり見られない読み聞かせ文学の特徴である頭韻やワードペアが数多く見られ、*conscience-words* の語彙選択への頭韻の影響が観察できる。*conscience-words* のうち、wit が最も多く押韻し

用いられ、conscience の意味を持つ場合や世俗の知恵を表す場合など、多義的に使われていることが明確になった。語彙 wit の広範囲性が造語 inwit の誕生に繋がった要因の一つと考えられる。

英語 conscience が初めて現れた背景には、その重要性が増しつつあった罪の告白に関するラテン語による神学の一端を、13世紀イングランドの世俗の隠遁修道女たちに、誘惑を断ち、罪を意識し、日々祈りを捧げる生活を精進させるために彼らへの『手引書』を通して伝達しようとする動きがあった。本論文の精査によって conscience 導入時の明確になった言語状況の主な点は以下の通りである。1) 初出とされる AW 写本そのものにも、初期写本では古英語からの conscience 同義語が同時に記録されていたり、後期写本では conscience の出現頻度がかなり高くなっている。2) Corpus 写本において conscience 導入に用いられた並置語 *þet is* の用法はラテン語 *id est* の影響によると思われる。3) Dobson によって「正しい修正」と呼ばれる、Scribe B の *wit* から *inwit* への修正は、Scribe B が動詞 *wit* を名詞と捉えたことによるものと考えられ、元々の Scribe A のテキストは真正なものであったと考えられ、Dobson の「正しい修正」との評価は不適切とする。4) Scribe B の全修正のうち、conscience/ *inwit* に関するものは量的には極めて少なく、神学的内容を扱っている点において極めて特徴的な修正であると言うことができ、*theological vernacular revision* と呼ぶことができる。5) 新造語 *inwit* の語形成を考察する上で、Ancrene Wisse Group において精神性を表す語彙として *wit* が最も多く使われている事実が、大きな意味を持つと考えられる。

本論文の考察により、古英語期の conscience 同義語の調査、AW 後期写本における conscience の現れ方、Scribe B の修正の再考察、Ancrene Wisse Group 同時期の他の作品における conscience に関する語の現れ方、conscience の神学的背景の考察、説明的並置語 *þet is* の AW 以前、同時代、以降の他の作品における使用状況、など数多くの更なる研究テーマが炙り出された。